

路上文芸総合雑誌『露（Rojuku）宿』

2000年4月25日発行

# 露宿 rojuku

第6号



定価500円

## 露宿

### 目次

|                   |           |    |
|-------------------|-----------|----|
| 表紙写真              | 橋本 弘道     |    |
| 文中さし絵             | ジェフ・リード   |    |
| 文中写真              | 岡田 知子     |    |
| 古いの秘訣十二首          | 富士森和行     | 2  |
| 雑感                | 武藤 堅治     | 3  |
| 無題                | Eさん       |    |
| 碁打ちのひとり言          | ただの酔っぱらい高 | 4  |
| 14/365なぎさ寮にて      | 角本 輝幸     | 5  |
| めじろ               | 新宿の孤老爺    | 6  |
| 分座我面露結・他          | A・Sデービット  | 7  |
| キャツツアイ            | 五林 修      | 8  |
| 木枯らし子守唄           | 弓削 鴻介     | 9  |
| 不信の時              | O.K.      | 10 |
| 酒のツケ              | 飲んべえ宮     | 11 |
| 詩4編それから他          | 土屋 太      | 13 |
| 雑句・心の断片           | 田代 猛      | 16 |
| あれから一年            | 宗春        | 17 |
| ぼくわたしらはみんないきている   | 恩田美代子     | 18 |
| 春夏秋冬              | 新青屋宿      | 19 |
| 露宿映画案内「優駿ORACION」 | 新宿 太郎     | 21 |
| 「男はつらいよ」          | 石山ひろと     |    |
| 映画上映のお知らせ         |           | 24 |
| 湊町より              | 高橋 美香     | 25 |
| 東京路上ふらり散歩         | 岡田 知子     | 26 |
| 露宿の本棚             | 笠井 和明     |    |
| イラスト              | 稻葉 剛      | 33 |
| 絵本の世界             | ジェフ・リード   | 35 |
| はり師いが丸の肝心かなめ      | 恩田 美代子    | 36 |
| 編集後記              | はり師いが丸    | 37 |
|                   |           | 38 |

## 老いの秘訣 十二首

富士森 和行

携帯電話一つ持つきえわが生きる社会の信の薄きを問ふ、

「美しく老ゆる秘訣」と云へる書を織りてうれしもわが願い購ふ  
幼らの命子宮に還りゆく如く月孕みきさらざ盡きぬ

枯渴せる泉に滲み出るごと老いの昂ぶりある朝のあり

胸痛みて逝きし俳人の碑想い立ち風寒き日の砂町に来る

うす煙り吐きつゝ貨車の走る場所今も残りぬ小名木川ゆく

茶髪ガングロわかものゝセオリー寂し日本の前途

宮邸の旧るき影見る想いにてガーデンテラスの春の一日

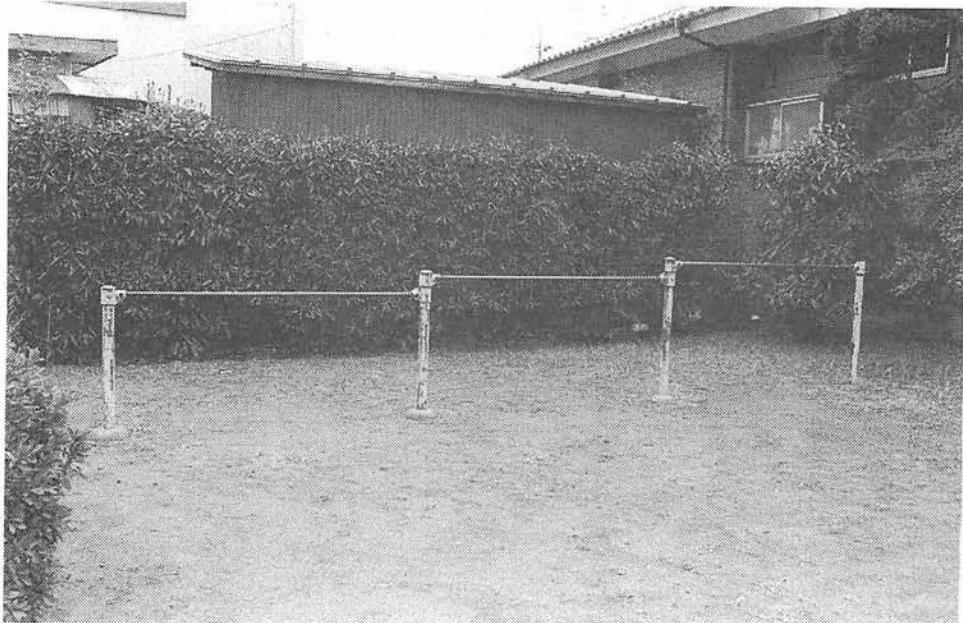
苦労して一杯の即席麺啜りおり家なきものらの背を丸めつゝ

明日の糧あがなふ雑誌抱へつゝ麺喰う通路に生きる背のあり

窮極の老いを支ふる場はあれど嚴しき福祉に今日も新宿を問ふ

ゆたかにも海を見おろす梅林の丘の斜面を春戯むるゝ

二〇〇〇年三月六日



雑感

武藤堅治

無題

Eさん

雪白や

川のせせらぎ

春うらゝ

雪国も

春が訪れ

つくしん坊

ほのぼのと

明るく染まる

朝の空



朝が来る前の間

私は何を夢見るのでしよう

夜の淋しさの中で、何を感じてきたかしら

新宿の町の中、うそが多い中で

愛をひとつ感じた時

心があたたまります

けやきの時

人のやさしさを教えてくれた

新宿の中でもうそが有る事も

教えてくれた

あの人は、先生と呼ばれるのが

嫌だと言つた

でも離れても思いやりと

やさしさをと言つてた

その言葉が今はなつかしい

春の訪れ

桜咲き

北国に

春の訪れ

桜咲き

平成と言う名につつまれ

昭和は遠くなりにけり

昭和時代がなつかしい。

\*「けやき」けやき荘—新宿区にある女性専用の更生施設のこと

## 碁打ちのひとり言

ただの酔つぱらい高

囲碁に理解のある方に、キツト逢えると思つて書いてみました。このつたないきつかけて碁を打ち始めて下さい。

朝日と読売と毎日と日経を買つた。碁の欄を見て捨てた。王立誠が新碁聖になつた。おめでとうございります。石田芳夫の大ファンのボク、石田芳夫頑張れ！

アル中の禁断状態で幻覚、幻聴を経験した。そのもとで自覚して書いてみた。

去つても碁、されど碁、今日も碁、

碁を理解する人が一人いればいい、その一人が理解する人を見つけるから、

昨日は碁、今日は碁、明日も碁かな、他になし、

碁は何か、碁は妙、されど碁は真理の追求な

のだ。

碁の友、酒の友、五酒を飲む、酒、焼酎、ワイン、ウイスキー、ブランデー、そして碁を打ち続ける。

酒やめたから、酒飲む奴と碁を打たない。勝つても酒のせいにするから、

碁を続け、偉せありと来しが雪

碁は碁、酒は酒、飲むと碁、

座料を取つてほしいと思つてる、アマチヤの碁打ちのひとり言、

餓死すとも碁は生きる、ああ、ああ、酒を飲むか、碁を打つか、

顔にヤケドを負いました。鏡を見て驚きました。碁盤の目になつてゐるんです。ヤケドのあとが、白と黒になつてゐるんです。

何と白を持つてゐるはずのボクの角がマガリ四目で死んでゐるではありませんか、もう生きた気持はしませんでした!!

今思えば不、でも鏡でボクの顔を良く見ると目が二つありました。良かつた!!

14—365日 なぎさ寮にて  
角本輝幸

✿✿✿✿✿

✿✿✿✿✿

東京都が越冬対策として実施している一月中頃から三月中旬までの間に二週間宿泊できる、なぎさ寮に二月二一日から三月六日までの十四日間を一部屋三十数人の仲間と生活してきました。

私は朝五時過ぎには目が覚めます。

これは夜、新宿の路上の一角に寝ていて朝カラスが五時過ぎには決まってカラカラ泣くのに目が覚めてしまう習い性のためでしょう。

ここでの生活の一部を書いてみたいと思います。朝食は八時から各部屋ごとに順を追つて娯楽室でいただきます。みそ汁ごはんは、おかわり自由です。私もそうですがほとんどの仲間もそうしているみたいです。この後は昼食夕食の時間以外は自由にできます。娯楽室でテレビを見る人、部屋で寝ている人様々です。外出は九時から四時半の門限までだいじょうぶです。洗濯室もありますからこれも自由に使えます。私は昼

食のあと毎日散歩に出かけます。寮の前は海辺で、この付近は、ほとんど工場地帯になっています。森林場もかなりありますからブランリブランリとはな歌まじりに片道一時間かけて時を過ごします。この時間が一番のんびりと楽しいひとときです。何せ食事、寝場所の心配がないのですから気楽なものですね。帰つて来てからは、先づ風呂に手足を伸ばしてのんびりとつかります。この一時が又何とも言えずハッピーな気分になります。五時半の夕食の後は新聞を読みニュースを見て今日一日の出来事を頭におしこみます。後は十時までのひと時を推理小説などを読んで時間をウツチヤります。自分がショボショボしてくると今日一日何事もなく過ごせたなどと思いつつ眠りにつきます。  
いい夢が見られますようにと思いつつ。



二月二十七日（日）私はいつものよう  
に散歩しています。

和の所から街並までは歩いて五分たら  
ずです。

日は散歩するようにしてゐる。御苑外園  
道路には、梅の木が二十数本程もある。

梅の花は今が満開です。辺りにはふくよかな香りがたゞよつていてる。

その香りに誘われたようになめじろが遊びにくる。

花の蜜をもとめて飛び交つてゐる。

五十年も昔、春になるとめじろとりに夢中になつたものだ。

卷之三

卷之三

卷之三

## 新宿の孤老爺

今六十歳を過ぎ無為に、たゞ過ぎゆくだけの日々、この半世紀何をしてきたのだろう、十年前、二十年前、三十年前と想い出

好い日和  
梅ふくよかに  
散歩みち

仲間達よりもいかにすぐれた音色で鳴くめじろを持つてゐるか少年の自慢でもあり、誇りでもあつた。

をまさぐつて、  
今老いさびれゆく自分をふり返つてなん  
と淋しい人生だろう

学校のゆき帰りにもお互にのめじろの  
自慢話に夢中だつた。

そんな時、胸がわくわくして走つて帰

かに夢中になつてゐる時のひととき

めき。  
そなが氣寺のときめきが今のおも

卷之五

たゞ惰性で生きているだけにすぎない  
老人となつてしまつた。

少年時代を過ごした九州の山や川、

うさぎ追ひしかの山  
こぶなつりしかの川

夢は今もめぐりて  
忘れがたき故郷

今六十歳を過ぎ、無為に、たゞ過ぎゆく

だけの日々、  
この半世紀何をしてきたのだろう、

十年前、二十年前、三十年前と想ひ出

散步みち

# 分座我面露結

(Braggameron!! 超宇宙語で超絶せる存在を意味する)

A・S・デービット(作)

(二〇〇〇・三・三)

分<sup>ブ</sup>↓分断された生身の自己を抽象的存在の個我。

座<sup>ザ</sup>↓座禅のマスター・コースの変形(ING現在進行形)

が路上生活体験修行!!

我<sup>ガ</sup>↓我が個我となり超我となり空虚に充満する。

面<sup>メ</sup>↓面壁。八年で大悟したと言う法<sup>ダルマ</sup>大師!!

仮面、素面、生面、死面、諸種の面々を剥離した

〈眞面〉に出会うチャンスに恵まれるのは路上生活

者の内在せる特技:福音となる。

露<sup>ロ</sup>↓露宿を超絶する究極の漏尽通の宿を求めて到達し

た悟性聖唱!!

結<sup>コン</sup>↓元とは無ではなくて無色透明なる:無限の意識工

ネルギー体である事を〈超宇宙人〉に教示され

て居ります。

# 万寿遷根命成

(WAGJURA-KOMME・N・A

超宇宙語でホームレスの意味!!)

A・S・デービット(作)

(異言・宇宙語研究家三十一年)

万<sup>ヴァ</sup>↓場数を踏んだ筈の老残のポンボコ狸(氏)も工サ場には苦労して居た。良い工サバを見付けたと思うと

寿<sup>ジユ</sup>↓順番がある? 笈と墨を入れた、凄味のある狼男が何処からともなく現れて吠え捲り恫喝して、すべての工サ

を持ち去つてスウーと消える!!

遷<sup>ラン</sup>↓乱雑な荷物置場を整理しようと穴倉に行つた処:ことは如何に? 一番大事なモノは魔軍籠(盜難)!! つまらぬモノだけが残つて居たり、焼かれたり…。まあ、

代々木事件の様に刺されて皮を剥がれて狸汁として喰われぬだけ(マシ)と考えてあきらめる。

根<sup>ゴン</sup>↓根をつめて仕事して資金をタメ、下降生活からの脱出付けた。その近くには:

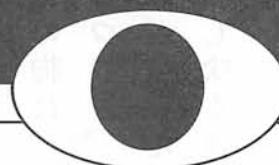
命<sup>メイ</sup>↓命長水と言う名の靈泉がありその水を飲んだ瞬間全身

に活力が漲り半年後その命長水の機能が現れたのか? 成<sup>ナ</sup>↓成る程と合点が行く好調振りで上昇生活者に返り咲く事が出来た。

(皆様、年は取つても枯れ木に花を咲かせましょう!!)

# キヤツツ、アイ

五林修



大いなる都に於ける一夜を、経験に依らず、この事を知り、その上で都を記す。

都とは、あらゆる要の集中する一点である。「極」とも言える。都とは、あらゆる先端を、支配しつつ変貌する線でもある。都を、いつ、誰が、何の目的をもって築いたか？その事は、歴史に明らかであっても、都市を構築した事のある我々路上生活者にとって、その事は意味をなさない。

都は城であるか？城は東西南北の埋程をもって築ずかれはしたが、『天海』を知る者は、少ない。

城北の塞は、何をもって、そこに立つか。

城西のとりでは、いつから、山猫族の本拠地となつたか。

ネコは、実によい。我々は路上生活者であるが、実に良いネコを求めて登城する武者は多い。

ネコは、その目をもって輝く。パブロフは、ほえて、猫は笑う。

目の輝きをもって、全身を柔らにはぐす。

武具をもって渡れぬ河を、ネコは飛翔する。

あの禁令を課した権力をもネコは恐れない。

そう、ネコは、私の理の想いでもある。

やがて、ネコの手を貸す事業が、その手を変え足を変え、路上に来た暁には、『大いなる路上で都を包囲しよう』

アルファベットのはじまりは、『Z』ねえ、笠井連合艦隊指令。コネはネコ。

# 木枯らし子守唄

弓削 鴻介

俺等が東京へ、旅立つ夜は、  
涙で濡れてた、あの娘のこけし、  
あの娘が帰つて、来ないから、  
こけしは独り、待ち詫びる、  
ネンコロロン、ネンコロロン、  
今夜は凍れて、冷たかろう、  
あの娘も独りじや、淋しかろう。

別れがつらいと、泣き泣き言つた、  
愛しいあの娘の、形見のこけし、  
あの娘は病氣で、死んだけど、  
こけしの胸に、生きている、  
ネンコロロン、ネンコロロン、  
あの娘が唄つた、子守唄、  
木枯らし吹く夜は、唄うのさ。

形見のこけしは、湯の街  
あの娘に良く似た、可愛いこけし、  
二度とは逢えない、悲しさを、  
こけしに語る、子守唄、  
ネンコロロン、ネンコロロン、  
あの娘が唄つた、子守唄、  
木枯らし吹く夜は、唄うのさ。

## 新宿福祉の実態は何か？

### 不信の時

0・K

私は先日福祉に行きました。体中がかゆくつて病院に行かせてほしいと言う内容です。でも福祉は私が保険証を持つてゐるという事と、酒が好きと言う事で、自分で何とかしなさいと言われ、それではシャワーだけでもと、言うと、それも駄目、これも駄目。

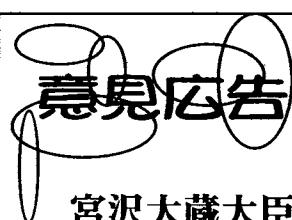
その前は、神戸に帰るので交通費をお願いしますと言つてもヒツチハイクで帰りなさいと言われました。私も悪い所はみとめますが、あんまり仕うちです。新宿福祉の冷たさを思いきり味わせられました。福祉というのは困った人を助けるものだと想つていました。

この冷たい態度は東京新宿だけでしようか？

誰でも好きで福祉にかかりたいと思つてゐる人はいないと思ひます。私だつて友達に頼んで住所を名前だけ貸してもらいました。仕事をさがすのにも身分証明が必要だからです。

その友達も、電話も止めてしまっています。友達にしたら福祉が何とかしてくれるという心づもりだつたのでしよう。その恩恵がはされたので次に、どうするべきか分からずさらに、何年か前に、サラ金からお金を借りて、かえさず差し押さえの通知がきた事でよけい、イライラしているのは分かりますが、今の私には何も出来ません。

私は福祉が相手の立場になつて本気になつて相談にのつてくれたら、不幸な人々が少しはへつてくると思います。



宮沢大蔵大臣 様

国家財政再建に関するアイデアを1億2千万国民に求めて下さい。

専用のFAX、インターネット、住所を開設して下さい。

1億2千万人の中には宮沢大蔵大臣を満足させるアイディアマン（ウーマン、チルドレン）が必ず存在します。  
(これが定説です。)

(平成12年) 2000年4月20日(皇紀2660年 明治133年) 五淵 四郎

# 「酒のツケ」

## 飲んべえ宮

自分に最初の発作が出たのは、五十歳の時で自転車で帰宅途中、突然息苦しくなり、胸を圧迫されるよう感じた。

急いで道端にしゃがみこんだが、ますます呼吸は困難になり、激しく動悸があり、全身に冷汗を感じた。

手足から口の周囲までしびれが拡がり、手は硬くひきつ、ふるえが止まらないかつた。狼狽しながらも自分で救急車を呼び、近くの病院にかけこんだ。

病院では血液検査、尿検査、心電図、胸部レントゲン検査がなされ異常があつた。

「アルコール性心筋症」といわれた。

すぐに入院しなさいといわれたが、入院がいやで病院をトンコ。

昨年は一月十五日に大塚駅でたおれ救急車で近くの病院につれていかれた。

その病病でアルコール依存症といわれ

たが、なんでおれがアルコール依存症なのかと先生にきいたら「振戦せん妄」アルコールが切れるときに手やからだがふるえる。

だれもいないのに人の声がする「幻聴」のです。

おれは今でも人の声がしたり、話し声がしたり、とくに子供の声が多い。声を聴いたときは外を見たり、まわりを見たりしますが、だれもいません。

先生の話すと、アルコールと関連する、代表的な疾患だけでなく、脳炎症状、歩行障害を主とする小脳の病気も起こります。目には弱視、骨髄では貧血症状を起こします。肝硬変や胃、十二指腸潰瘍など肝臓や胃腸への影響はよく知られていますが、食道靜脈瘤破裂や慢性膵炎も代表的アルコール関連疾患です。心臓への影響はアルコール依存症の急性死と関連があります。

自分がアルコール依存ではないかと思われる方、その可能性がある方は早く専門家に相談してください。

依存症であれば断酒をしなければいけませんが、早い治療ほど治りやすいのです。早期発見、早期治療で長生きをしましよう。

では、おれは断酒をできるのか？

昨年の七月に退院七月八月九月と三ヶ月断酒ではなく節酒をした。二回目の入院

本当は断酒をしなければいけないのに、節酒にし

たのは、おれには酒をやめる自信がなかつたから。

病院から「やまで寮」に帰る、新宿から京王線で病院にかよつていた。

定期を買い毎日病院にいき、かえりに新宿の町を通り、寮にかえるのですが、とくに夕方などよつぱりいなどの酒の匂いがたまらず、一杯ぐらいだいじょうぶと思ひ飲んだのです。その一杯が二杯になり三杯四杯最後は腹一杯飲み寮に帰れなくなり新宿でぶらぶらするようになり色々な人達と知り合いになりましたが、みんな良い人達で酒とめしは、いつもありました。

昨年の十二月に四回救急車で、病院で先生に「酒を飲んだら死ぬよ」と言わされましたが、病院からでるとコンビニで酒を一杯キューと飲んで仲間の所に帰り、めしをたべずに酒を酒酒の毎日でした。

笠井さんと救急車で大久保病院に行き、大変迷惑を掛け申し訳なく思つています。

また仲間の人達に迷惑をかけ、とくに、社長、「森さん」、池ちゃん、矢野ちゃん、かなやん、新宿連絡

会の「おち先生」はじめ皆様のおかげでたすけていただき、ありがとうございました。誌面をかりて、お礼申しあげます。

これからですが、

一に断酒二、断酒。今は断酒のことばかりです。今、この気持をいかに持続することが大切、初心をたいせつに素直な自分になりきることです。

毎日の生活のなかで腹の立つことは、いっぱいあります。腹を立てていては、できる断酒もできません。毎日、その日一日のことだけを考えて「今日一日断酒」をつづけていくのです。断酒会で、ある人が「一日を考えると長いので、その一瞬一瞬だけの断酒を考えたほうがよい『刹那の断酒』をつづけましょう」とつていました。が、一日以上のことは考えず今日一日の断酒ができれば、よかつたと思い、自分に今日断酒ができた「良かつたね」これを毎日つづけていけばよいと思う。

おれは断酒をします。

## それから

路上の生活が終わつた…。もう半年はすぎたろう…。もうもどる事は無いだろうか…いや！もどつてはいけない…でも色々な出会いがなつかしい…それから毎日、たいくつな日々がすぎる…仕事は無い…路上では色々あつたのにそれから…もう一回、路上で探さなければと思つ…でも、もどつてはいけない…路上で暮らす事は皆、望んではいなかつたはず…もしかすると路上の方が幸せだつたのかもしれない路上ではあじわえない食べ物や器具…でも心は路上で、忘れたかもしれない…何を言つうかと笑う人もいるかもしれない…もう一回もどつてくる…いつの日か…路上で忘れた物を探すために…いつの日か…いつの日か…。

(自宅にて、仕事がなく途方にくれています。

でも、今度もどる時は支援者として…)

二〇〇〇年三月一日

## 裏切り者

かなり寒い夜だつた…路上で冷たい水を飲みほす…そして誰にもわからないように独り言をつぶやく…鳥肌がたつ…みんな今頃は何をやつてゐるのだろう…僕は裏切り者だらうか…何も言わずにこの土地を去つた…何もできぬまま…裏切り者！と声が聞こえてきそうだ…まつてくれ！僕には母がいる…弟もいる…弟は泣いた…野宿していた事を…でも僕は好きでやつていたと言いにく…そして何も言わずに去つていつた…礼なんて言えないと…何人言えばいい、何も言わずに去る事が僕の礼です…でも裏切り者と声が聞こえてきそうだ…かなり寒い夜に水を飲みほす…皆、冷たい水を飲んでいるのだろう…僕は家で熱いコーヒーを飲む…だから僕は裏切り者なんだ…。

## 北九州の路上

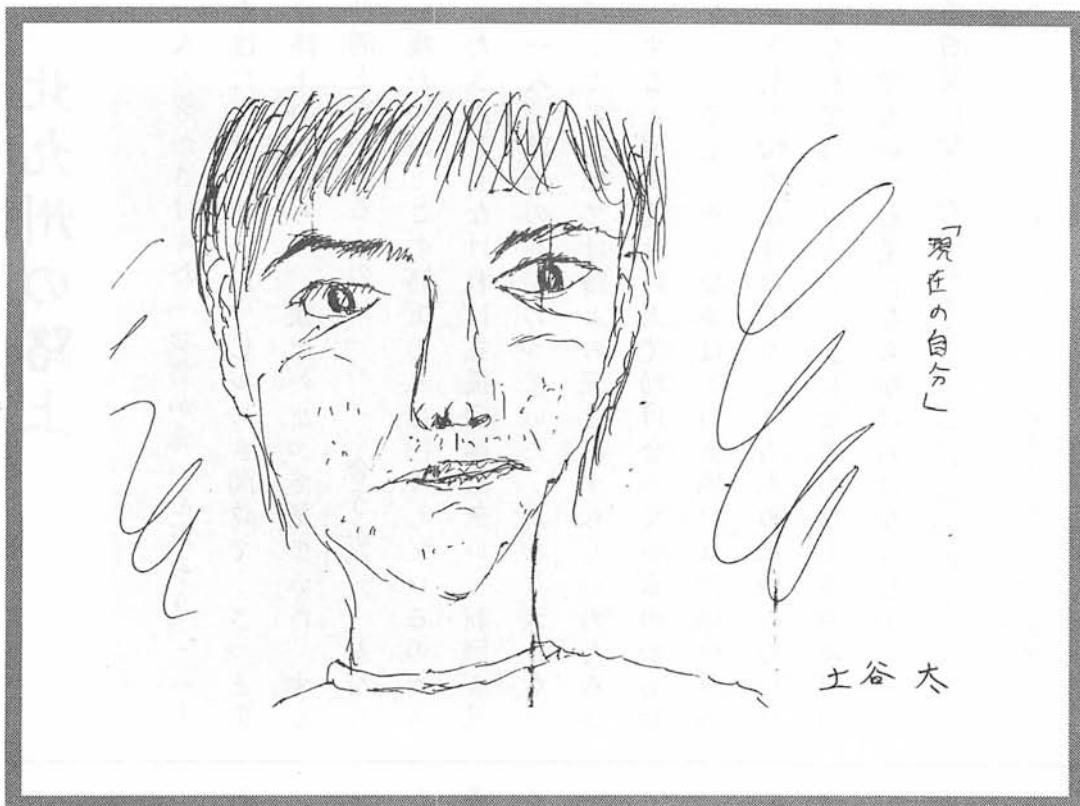
### ごまかせない

一人の男がさけんだ「お前が悪いんだろう。」一人の女性にさけんでいた。ビルの玄関口で：きつと男性は路上の人だろう、僕はだまつて見ていた、すると仲間と思われるものに「パン、食うか。」：かなり寒い夜だった：この路上の人は何をしているのだろう、たき出しもなければ支援団体も無い：新聞を見た：一人の路上の死がのつていた：かなり大きな一面で…この土地では路上の死はめずらしいのだろうか：すると仲間達は路上で助け合っているのかも知れない…でも：そんな事はこの土地には関係の無い事だと割り切る人達ばかり：でもあの土地みたいに死をなれてはいけない：星になるのはもうやめてほしい…でもいつか星にならなければならぬ…そして今日星になつた者の事を思つていのつた…。

（新聞にのつていた路上での死があつたので  
それを思つて書きました）

もうごまかせない！何人目だ！また野宿者が増えた！別に野宿するのが悪いと言つてるわけじやない！生まれた時、昔人は野宿者だつた！今は何んだビルが建つ！土がコンクリートでうめられ花もさかない！これが人の暮しか？時代が逆転しただけさ！本当は野宿が本当の人の暮しさ！でも今の世はそれをゆるさない野宿するだけで罪になる！これは何んだ！今！野宿しろ！と言われたら何人生き残れる！もうごまかせない、今、野宿者が増えている！誰のせいでもない、もちろん野宿者のせいでもない！こんな土地じやあ花もさかない、せめて花が見たいのさ！野宿者の心やすらぐ花を！今こそ花が見たい…。

土屋太



## 新宿連絡会は お米消費増大運動の先頭に立ちます

私達は年間10トンの米を軽く消費する炊き出し部門への支援を全国の人々にお願いしています。

古米、古古米、大歓迎！（郵送は下記住所に土日指定でお送り下さい）

信わるものが、あったかい

全糧連の全国共通おこめ券全国のお米取り扱い店、有名百貨店、スーパー、コンビニ、など一枚540円で販売しています。

全糧連協同組合 東京都千代田区麹町3-3-6をホームレス支援に贈る運動を新宿連絡会は提唱しています。

冷えた残飯より暖かい飯を！

東京で喰らうどんぶり飯の味は遠く離れた故郷の味  
伝えて下さい人のぬくもり、米のあたたかさを！

新宿連絡会は

カンバで得たお金もお米も一粒、一円たりとも残しません。

仲間のために使い切ります。路上死のない社会を！

不幸な人々を切り捨てない社会を！

カンバを頂いた方には諸活動・情報と財政報告を載せた

「連絡会NEWS」を隔月お送りしています。

# 新宿連絡会

東京都台東区日本堤1-25-11山谷労働者福祉会館 気付

☎ 03-3876-7073/090-3818-3450 Fax 03-3876-7073

カンバ金送り先：

郵便振替口座 00170-1-723682 「新宿連絡会」

## 雜句

(故郷の長崎を想ひて、そして、昨日も今日も明日も雨だった雨多き日の過ぎ去り逝つた青春の想出の詩)

### なごり雨

- (一) うしろ髪 ひかれて、  
ふりかえる。  
額に入つたあなたの寫眞、  
声が聞こえるわけじやなく。
- (二) 雨は一週間もふつて いる、  
あたしは雨に囲まれ身動きできない、  
どこか行きたいわけじやなく。
- (三) うしろ髪濡らして、  
背中に小さな水たまり、  
あなたが残したなごり雨。

(親もなく兄弟もなく住いもない、  
故郷だけど、心に残る想い出だけは残る) 田代 猛

## 心の断片（心に残つた言葉）

「出会いは運命そのものである。私たち人間は出会いの中で人生の長いトンネルをくぐり抜けているのである。私の場合もひとりの人間との出会いによつて、新しい第二の人生の道が始まつた。」「新たな日に向けた夢を守つて下さい。どんな困難の中でも夢を捨てないで下さい。最悪の場合でも夢を守り、明日があることを忘れてはいけません。」

金大中夫人（李姫鎬回想記「勇氣ある女」より）

「相手の心に届く、自分の言葉を育てる。」

言葉で私を育てる。相手を支える言葉を育てる。」

山根基世アナウンサー（NHKラジオ深夜便より）

- (一) 冬に降る雨、雪より冷たい。
- (二) あたしの肌に落ちてくる雨、雪より白い。
- (三) あなたより先にあたしが、みつけた、  
ふたりの間に、雨の染み。
- (四) 冬に降る雨、雪より痛い。
- (五) 心に積もる、冬の雨

嚴冬を乗り越えて、暖かい春が訪れました。春夏秋冬の人生です。  
共に頑張りませう。頑張ろう。

田代 猛

## あれから一年（自分を考える）

やむなく野宿して早いものです一年の日々が流れてしましました。

今私は今日まで何をして来たかを問う。

この一年の間色々な事を体験したと思いますが、まだ色んな事を考えて行くことです。我々野宿者は決してなまけ者でも無く唯流されているものでも無いのです。年を取つても働く限り働きたいと考えているのです。でもこの不況で仕事もなく、あせらばかりであります。

これからは、自分を大切に余生を、今行動しているボランティアで人の為に働くつもりです。この一年間を無駄にすることなく。

私です。

宗春

The day of the days

# D-DAY

## 野蛮な時代の終わり

破壊的な競争は人間の精神を腐食し“いのちの戦い”は極限に達している—子供の世界も、大人の世界も。新しいミレニアムの教師が世界の舞台に現れる時、苦悩の人生は必然ではないことを、他に選択があることを明確に示すだろう。



## ベンジャミン・クレー姆講演会 —通訳：石川道子—

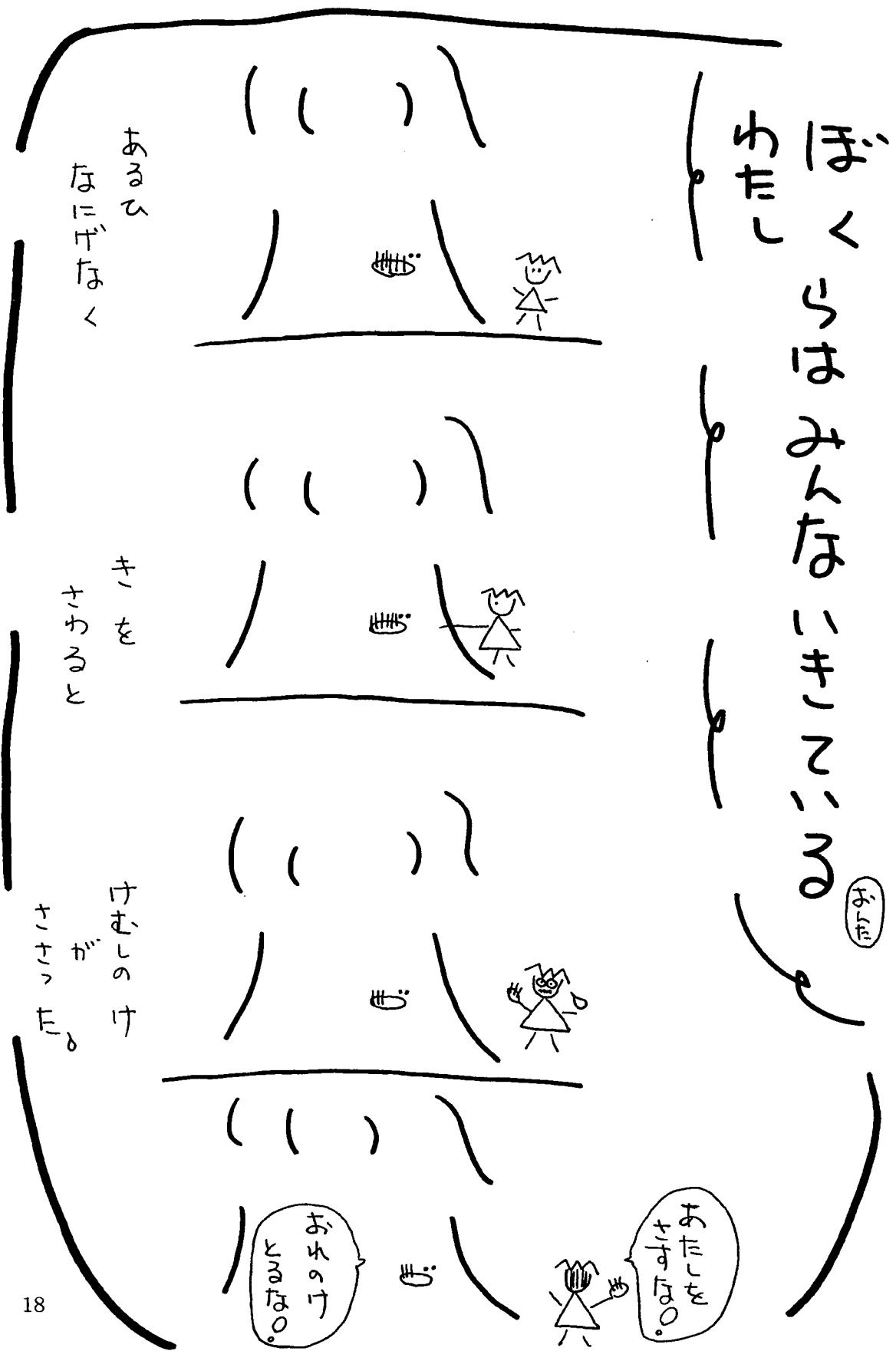
●5月13日（土） PM 2：00～6：30 (PM 1：00開場)

●日比谷公会堂 地下鉄「日比谷」A14、「霞ヶ関」B2

●問：TEL03-3358-7130 入場無料

各地講演日程：5/15（月）名古屋、5/20（土）大阪、5/23（火）福岡

主催：ベンジャミン・クレー姆招聘関東委員会





露宿の夜は、星が見えて、月も見える。星は、月の光を遮る。星は、月の光を奪う。星は、月の光を隠す。星は、月の光を吸収する。星は、月の光を反射する。星は、月の光を屈折する。星は、月の光を拡散する。星は、月の光を吸収する。星は、月の光を反射する。星は、月の光を屈折する。星は、月の光を拡散する。

露宿の夜は、星が見えて、月も見える。星は、月の光を遮る。星は、月の光を奪う。星は、月の光を隠す。星は、月の光を吸収する。星は、月の光を反射する。星は、月の光を屈折する。星は、月の光を拡散する。星は、月の光を吸収する。星は、月の光を反射する。星は、月の光を屈折する。星は、月の光を拡散する。

# 「優駿ORACIÓN」

杉田成道 監督

1998年

露宿映画案内

スペシャル  
二本立て

名作や通好みの作品を紹介されても、映画は娯楽だと思つてゐる者にとつてはチト辛い。

そんなあなたにお薦めなのが「フジテレビ開局30周年記念作品」で金かけた無名の監督のバブリーなこの映画。緒形拳、仲代達也、田中邦衛、石坂浩二、加賀まりこといつた歴代の大物俳優を揃え、当時はフレツシユであった齊藤由貴、緒形直人などの若手を抜擢し、更に本物のダービー馬メリーナイス号を主役に据えるという、泣く子も黙る豪華絢爛さ。しかも、原作が信じられない（？）事に「泥の河」の宮本輝。

しようっぱながら繰り広げられる北海道の大河、桜のシーン、雪のシーンの数々はまことに映像美極まりない。しかも日本中央競馬会（JRA）が協力しているのでリアルティ溢れる競馬の世界の裏表。この映画を見て競馬ファンになつた御方も大勢いるとかいないとかでJRAも大儲け？ そういや、私がこの映画を見たのも浅草場外馬券売り場の前にある映画館。今思えば見事にタイアップしていたようである。

それはともかく、競馬が嫌い、ギャンブルは「諸悪の根源」とお思いになつてゐる方に十分楽しめるストーリー。もちろん競馬は人生そのものだと思つてゐる競馬ファンにも

は娯楽だと思つてゐる者にとってはチト辛い。

十分通用する感動の映画なのである。  
安っぽい感動を押しつける映画などと言ひなさんな。大衆娯楽というのは、普通のおっちゃんやおばちゃんが見るものなのである。芸術してゐる映画など誰も観にいかないものである。

ストーリーは単純明快、「風の王」の末裔（本当はほとんどのサラブレットは血統上、末裔なのであるが）オラシオン号（祈りという意味のイタリア語）が北海道の貧乏牧場に生まれ、アクシデントがありながらも日本ダービーに優勝するまでの物語。こう書くと競馬版スポーツコン物語と勘違いされるが、相手は馬、「マキバオー」のように喋りはしない。オラシオン号の成長と同時にこの馬に関わる人々の人間ドラマが繰り広げられる。生産牧場、育成牧場、馬主、調教師、騎手、様々な人々が夢や希望をこの馬に託す。しかしそんな事などをまわずに「走るために生まれた」サラブレットは、唯、やみくもに疾走する。

だからそれは本当の「自らの夢」ではなく「他者への祈り」に近いのである。託された方が馬だけに尚更悲しい。しかし、どうしようもない時は他力本願の「祈り」しかないじやないか。それが本当の「夢」に結びつくなら良いではないかと、これはおそらく深読みだろうが、そんな事も感じてしまうのである。

メリーナイスなどという極楽トンボな名前ではなくオラシオンと命名したところがこれまた憎いところ。その点だけはさすがに宮本輝である。しかし、四百流星のこの馬のまことに綺麗な事。その姿を映画に残せるメリーナイスは幸せ者である。ダービー優勝後一度も勝てなかつた期待外れのどうし

ようもない馬だつたが、そんな恨み辛みも今となつては懐かしや。実を言うと日本のダービー馬というのは悲劇の象徴のような存在で若い頃一度頂点に立つてしまふと、その後活躍する馬はめつたにない。右足に爆弾を抱えたオラシオン号のその後はおそらく配役と同じ運命だつただろう。「祈り」はそうやつていつも現実に庚される。もちろんそれでも競馬界にとつて日本ダービーは最高の権威である。同じG1と言えども天皇賞でもなく有馬記念でもなく、生産者や馬主、調教師、騎手はいつもダービー制覇を夢見る。自分が決して走る訳でもないダービーを。

この映画に奥行きをもたせているのは緒方拳演じる貧乏牧場主渡海千造と「東京で三つしか勝てなかつた、所詮千八までの」母馬ハナカゲとの奇妙な関係であろう。この「二人」の関係はまさに一心同体に近い。そして「二人」共演技が渋いこと渋いこと。映画の後半「私はハナカゲと一緒に幕引です」と言い、か弱く歌う「お馬の親子は仲良しこよし…」その歌の切ないことつたらありやしない。

「私たちは誰の馬券を的中させるために、今日の荒野をひた走りに走りつづけているのであらうか？」

と書いたのは寺山修司。JRAによつて寺山の競馬論が歪曲されてしまう今日この頃であるが、競馬は人生の比喩ではなく、またロマン一般でもなく「人生はたかが一レースの競馬」と思える境地がここにはほんやりとある。だから、この映画の表層だけを見て、ないしはサラブレットの外見的な美しさにだけ惹かれ、ただJRAに金を貢ぐだけの競馬ファンにだけはなりなさんなど、余計ながら最後に忠告しておこう。ギャンブルなどいくらもある。「誰の馬券を的中させるために」という事を考えずしてうかつに馬券なんぞを買つちや駄目だよ、おつちやん達！そんな金があるなら映画でも観に行きなさい。

(新宿太郎)

なぜ寅さんは旅に出るのか

「男はつらいよ第30作  
花も嵐も寅次郎」

監督 山田洋次

大分の温泉街で、東京から観光に来ていたけい子（田中裕子）と、母の納骨に来た三郎（沢田研二）に出会つた寅次郎（渥美清）は東京に戻つたあと、百貨店で働くけい子と、動物園で働く三郎との仲をとりもち、恋を成就させようとひとはだぬぐ。そして恋が実つたあと、また一人あてどない旅に出る。

映画の出だしで、寅さんが柴又の家の前で向かいの娘と手を握りあつていたため、夕食時に父が怒つた。「出ていけ」すぐに荷物をまとめて店を出て行こうとする寅さん。「さくら、おれを止めるなよ。おれを止めるなよ」と言って止めてくれるのを待つ。しかしさくらは何も言わず、寅さんはやもなく家を出てゆく。直後に父は言う。「さくらが止めてくれると思つたから、出て行けと言つたのに」

どうもこの家には、口にはしない一つのきまりごとがあるようだ。それは誰かがひどいことを言つても、他の人がいさめてくれる。言いかえれば、誰かが調和を乱しても、他の人がとりなしてくれるといつものだ。だからこそひどいことを言う人も安心して言えるのだろう。

そう思つてこの家庭をながめていると、お互にとても気を使つて温かい家庭をつくつてゐるよう見える。子供のころから兄と比べられていただらう、非の打ちどころのないさくら。無口だが内心は寅さんのことを中心としている父。働き者で世話を焼きで氣丈夫な母。寅さんがいらないときは、この家のどこで息をしてゐるのだろうと思う、居場所のないさくらの夫。自分の家が楽しくないのだろうか、気がつくといつも寅さんの家に入り込んでいる隣りの社長。みんなが、自分の役割を意識さえせずに演じながら、氣を使つて暮らしている。

もしこの家に無口な父と世話を焼きの母しかいなければ、寅さんは息苦しくて年に一度さえ帰れないだらう。そうなれば寅さんシリーズはただの股旅ものになつてしまい、葛飾柴又に観光客は押しそよせなかつたに違ひない。さくらがいるからこそ、たまに帰れるのだ。しかし非の打ちどころのない妹に氣を使われるとやはり居ずらい。さくらがもう少しダメな妹なら、もう少し長く寅さんは家に居られるだらう。となれば倍賞千恵子ではさくら役は演じきれない。内藤やす子なら、寅さんは家業のだんご屋をついでいたかもしれない。

こう考へると、寅さんは旅に出るべく宿命づけられていよいに見える。

旅に出ると、氣を使つてゐるが、温かい家が懐かしく思い出されるだらう。だからと言つてすぐに帰れば自分の役割からはずれてしまう。家族も、しばしば帰ることを望んでいないのは雰囲気で分かる。だから、おれは旅から旅へ生きる男よ、などと言つて温かい家を振り切る。

しかし何かつらいこと、悲しいことがあつたときは、たまらなく温かい家が恋しくなるだらう。実際以上に温かい家をおもいえ

がいて家に戻る。その日は温かく皆が迎えてくれるだらう。二日・三日と過ぎてゆくと、いつものあの息苦しさがまわりの空気をうづめてゆく。

さくらの夫が息子に、寅さんは、「好きで旅行しているんじやないぞ」とさとし、それをうけてさくらが「自分の家を持ちたくても持てないのよ」と言う。やはり好きで旅に出てゐるのではないようだ。ではなぜ家を持てない、結婚をしないのだろう。顔が四角いからか、不器用だからか、やさしすぎるからか。逆にもし結婚したらどんな家庭を持つのだろうか。今ままの寅さんなら、たぶん気づまりな家庭を作つてしまふのだろう。それでも夫として、父として家に居続ければ、爆発するしかなくなる。爆発したくなければ、つまり妻や子供を傷つけたくないければ、旅に出るしかない。と言うことは、自分の家を持つても、持たなくとも旅に出来るしかない。

さくら夫婦のこの会話は、さくらの夫の「それが兄さんの欠点でもあり、美点でもあるんだけどな」で終わる。冷静なとき、人は、こう思えるのだろう。

さて、どうすれば寅さんは、本当は好きでもない旅に出なくて済むようになるのだろうか。自分の家、つまり家庭を持つことができるようになるのだろうか。寅さんは寅さんのまま寅さんとして逝つてしまつたようだ。

(石山ひろと)

# cinema



## お知らせ

この欄で紹介された「優駿」「男はつらいよ 第30作 花も嵐も寅次郎」が新宿連絡会の御好意により路上上映ついに決定!  
路上につき観賞料はまったく無料!

連絡会自慢の大型プロジェクターによる特設ワイドスクリーンが  
久々に登場!

「男はつらいよ 第30作 花も嵐も寅次郎」

日時 5月21日(日)

炊き出しの後、7時過ぎより

新宿中央公園ポケットパーク

(雨天の場合、翌週に順延)

「優駿」

日時 5月28日(日)

炊き出しの後、7時過ぎより

新宿中央公園ポケットパーク

(雨天の場合、翌週に順延)

主催 露宿ペン俱乐部 協力 新宿連絡会



みなとまち

# 湊町もり



新潟県新潟市、信濃川が海へ注ぐあたり、湊町に住んでいる。田舎車で五分程で市を中心街にだとしまつ住まいにあるのに、おもわれない、かく、独創的、洒脱を懸念せんこの町だ。

ある。（取り残す、と表現する人もいるが）  
ナロいがらの家並、蔵、廻しなる小路。

豆腐屋が、せまいあゆ湯気、

ブリキの看板のお菓子やさん、  
田中、家の前の椅子に腰  
を下ろし通りを眺めるおばあ  
さん。船の汽笛、カモメの鳴  
き声、海からの風。

ひょいり現われて住み着いた

私に、惜しき氣もなく風景を  
提供してくれる様な氣さ  
えしてくる。（半分は私の氣の  
せいかもしないが）地味なた  
が、色々なスキ間を備えて  
人を迎えてくるふういう  
の大好きな町であるがする。

なんだか、話せる町、なんだ。（湊町の紹介でした）



高橋 美香

東京

第6卷

路上

散歩

ふらり

写真・岡田知子

文・笠井和明

「東京の陰 — 八王子」



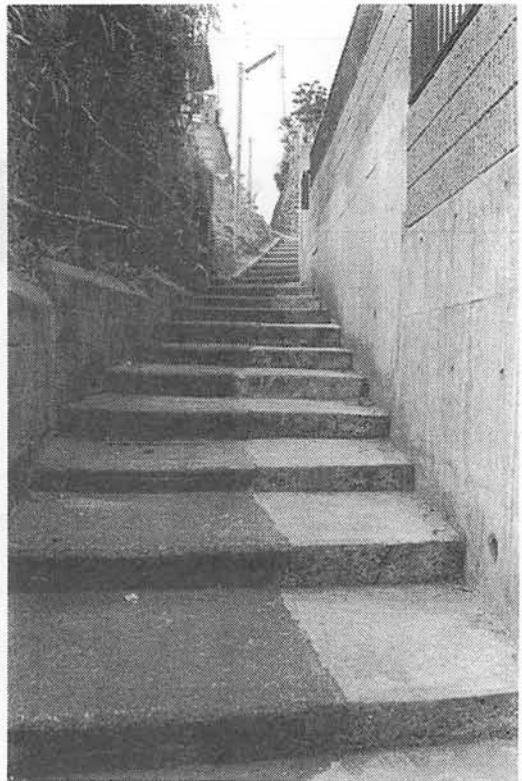
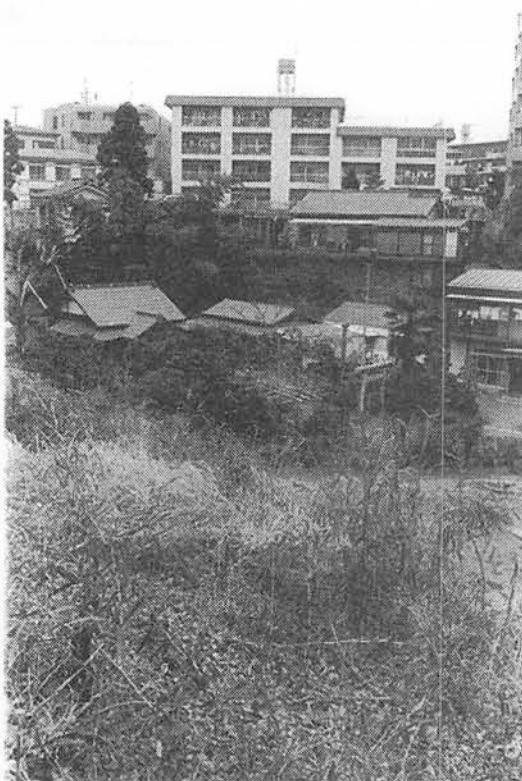
三多摩の人が、例えは新宿に行く場合など「東京へ行つてくる」と言う。

今はベッドタウン化が激しく区部に通う労働家族を多く抱える三多摩地域（旧西多摩郡、北多摩郡、南多摩郡の総称）であるが、ここに古くから住む人々はアイデンティティを込めて自らの事を「三多摩つ子」と呼ぶ。

かく言う僕も八王子に生まれ育った「三多摩つ子」の末裔であり、「三多摩つ子」の中の「八王子つ子」の偏屈さと自尊心を知らずと受け継いで来た者である。同じ東京と言えども「三多摩つ子」は「山の手つ子」や「江戸つ子」とは気質や文化や方言まで違うのである。もちろん景色も空氣もまるで違う。

東京都心部を散策してきたふらり散歩であるが、今回は春ということもあつて八王子くんだりまでの遠征という事となつた。鉄道路線が完備されているとは言え都心部から八王子まで行くのはもはや小旅行のようなものである。実を言うと「八王子つ子」の僕も高校卒業と同時に実家を飛び出して以来、この地とは疎遠となり、八王子の町を時間をかけてふらつくのはおよそ二十年ぶりくらい。

しかし、この駅の変貌さ加減は目を覆うというか、悔しい限り。かつての木造駅舎の跡も都内で蒸気機関車が最後まで走っていた構内の面影も消え、ほのぼのとしたローカル線の横浜線も八高線もよくある通勤電車に変わつていた。「そこう」ビルといふ東京の大資本にあたかも乗つとられたかのような駅。そこから垣間見える北口にはバブル時の近代的ビルがピカピカに光つていやがる。



雲の多い日だつたが冷え込みもなく、季節はぼんやりとした春。そのせいか、再開発がこれから待ち受けている八王子南口は、あつけら



かんとした面持ちがある。駅前にはフェンスに囲まれた空き地があり、駅前広場の容貌は北口と正反対。土曜日の昼前、これら「東京に行く」のだろう家族連れや若者が回りを気にもせずに早足で駅への階段を登る。

甲州街道が走るかつての宿場町は北口を中心とし、駅と線路が分断した南口方面は裏八王子である。駅前の通りに「野猿通り」なる名称がつけられている事からも想像でさるとおり、かつて子安から片倉へと続く高台はおそらく宿場町とは無縁の世界が広がっていたのであろう。宿場町は普通街道沿いに発展する。八王子などはその典型で、甲州街道沿いは今も横山町から千人町まで横にすこぶる長く繁華街が続く。その一方でそこから外れた地域などは商業地からは放つておかれて荒れ野原となり、やがて時代の進行と共にそこに無秩序に住宅が敷き詰められる。近代以降、屈指の養蚕地域として、また織物工場を中心とする工業地域として、東京から独立化した都市化が可能であつたこの地も、明治26年「三多摩編入事件」により東京の一部となり、以降、東京の住宅問題の「受け皿」として、その荒れ野原は容赦なく利用されて行く。



裏八王子の古い一軒屋が区部のそれとは違う趣があるのは、そんな歴史のせいであろうか。

八王子は盆地であるだけ市街を離れると起伏が多い。そして荒れ果てた空き地や畠もまだまだ沢山ある。子安町から山田川を登つていくと多摩少年院が高台の上にひつそりと広がっている。住宅だけではなく東京のあらゆる社会問題の「受け皿」が多いのも三多摩地域の特色と言える。靈園はあちこちにある、老人病院や精神病院、養護施設などもあちこちにある。近年は大学までもが学生運動に嫌気が差し、都心部から大挙引っ越しして来た。

一見さらびやかな都会も、そこへ行き来する交通手段と住宅と、そこから派生する様々な問題の「はけ口」がなければ成立し得ない。東京はそうやつて三多摩の荒野を利用しながら西へ西へと押し寄せて来たのである。逆に考えれば東京都心部は中流（圧倒的多数派）の勤労家族が安心して暮らせる都市であることを放棄した特殊な町であると言える。東京の都心部に住む人々はすこぶる富裕な家族か、単身者か、それともすこぶる貧しい家族か、である。三多摩地域におつちやんらが増えてきたと言いながらも、依然23区内に圧倒的にその数が多いのはそんな理由もある。東京という街はそう考えるとつくづく特殊な街である。

八王子の荒野が滅びるのはそんな東京の特異さと傲慢さとの比例もあるが、これは双方から見ても不幸と言えよう。

小比企の高台から富士森公園に降りる。おかしな古物屋の脇を渡ると奇抜な格好の市民体育館と市民球場、その森の中にひつそりと建つ浅間神社。何人かのおつちやんが昼寝を楽しみ、寝床や一服の跡が神社の脇にちらほら。都心部に比べ平和なごく当たり前の光景。その当たり前さの前に排除とか差別とかは無縁である。思い返せば僕が少年の頃も同じようなおつちやんらの姿はこの公園にもあつた。どこか不器用でお人好しでそれでいて頑固でと、そんな世渡り





の下手な人々はいつの世にもいた。貧しさは不幸ではなかつたのである。

東京都心部の不幸とは、そういう中間の視点がなくなつてしまつたからなのではないかとふと考へる。  
丘がある、竹藪がある、煙がある、林がある、一軒屋がある、ドブがある、錢湯の煙突が聳える、関東ローム層の赤々とした大地が見える、そこに普通の家族があり、子供達が喜々と遊ぶ。東京都心部があえて壊していつたものが、ここには間違いなくある。  
それを安らぎなどと表現したら野暮であろう。普通という凄さ、そんなものを感じてしまう。

富士森公園から台町の丘を登り、散田町を抜け、盆地のすり鉢の八王子市街を見下ろしてから、梅の花が満開の丘を下る。そこには子供の頃遊んだ畑はまだ残つてゐる。郷愁ではなく、そこには普通の人が生きるに必要なものがあるだけである。

かつての荒野は、東京のために少くなつた。が、その東京のおかげで、東京にはない普通さを多く確保した。そう言つたらかつての三多摩自由民権運動の闘士達は怒るだろうか？

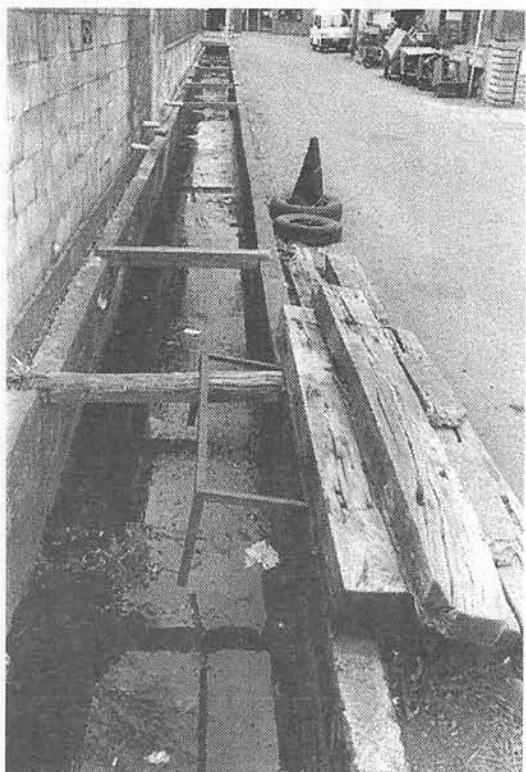
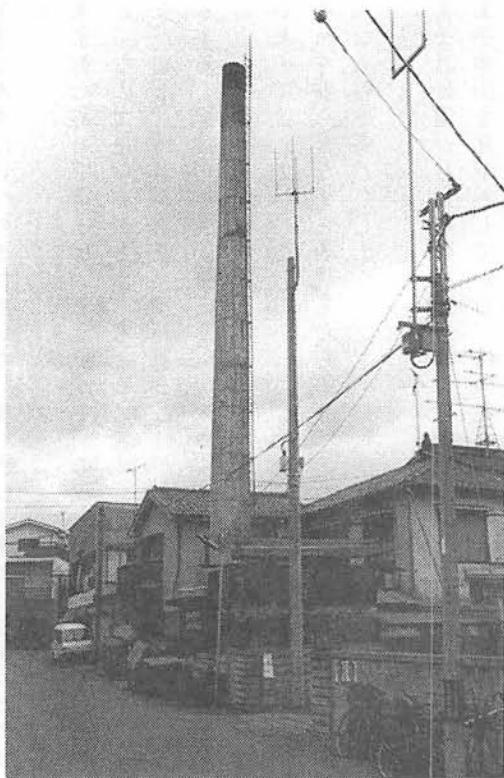
早春の天気は変わりやすい。曇り空から晴れ間が見えたと思つたら、小雨が降つたりと、雲は先ほどから忙しい。そんな季節の気紛れも、この街は気軽に受け入れてしまいそうだ。それが普通なのだと、氣ぜわな人々を優しく諭すようだ。空があり、空がよく見え、人は必要以上にいない。地方都市のようで地方都市でなく、田舎なだけれども田舎でもない。これは決して恥ずべき事ではない。何故、駅前だけ、あれほど変貌させてしまつたのであろうか？東京發の平均化というのは本当にろくなものではない。

裏八王子の丘を登り降りしていた僕らも、そろそろ歩き疲れ、盆地の底から線路を渡り、いちょう並木が壯観な甲州街道によくやく辿り付く。並木町まで来ればかつての宿場町の赴きはほとんどない。その街道はただひたすら長い一本道の街道。東海道のような町人文化的な開放感はなく、徳川幕府が甲府へつながる軍事街道として設置しただけあり、どこかしなびた雰囲気が漂う。三多摩とは縁も所縁もない大正天皇以降の皇族一族の陵がこんな所にひつそりとあるのも妙なもので、意図的に都心部から三多摩に追いやられたのか、それとも単に土地がなかつただけなのかと、あらぬ想像をしたりする。皇室の墓地問題の「はけ口」にされても三多摩は迷惑なだけなのであるが。いずれにしても、ここいらは山々につながる清楚な土地である。

南浅川橋を渡るも御陵にまではさすがに登る気がせず、その麓にある陵南公園で一休み。皇室施設が近い割には実におだやかで静かな公園。女の子達があつけらかんと笑いながら戯れる。他に人影はない。早春の山の匂いをおもいきり吸い込む。

公園沿いに流れる南浅川の上流には古びた家々が多い。もうそこは、かつての中央線の終着駅である高尾の近く。目の前は山の麓である。駅前にはおみやげ屋が数件、まるでしなびた地方の駅前のようにであった。

独自の産業があり、独自の文化がありながらも東京に編入され、利用され、ついにはベットタウンに成り果ててしまつた不幸な歴史を持つ八王子という都市。しかし、その不幸さを不幸と思わぬ風景と精神は裏八王子に脈々と受け継がれているような気がした。この地には主張があり、氣概がある。最頑固で言つてるのかも知れないが、この街の普通さは、ノスタルジアのそれではない批判精神旺盛の普通さであり、意図せぬことに、何となく、街の構造がそうなつちやつてているの





である。歴史と町並みというのはおかしなもので、そういう事を何故か刻印してしまう。

都市はあらゆる階層の人々と、あらゆる階層の人々の光景で成り立たなければならぬという、当たり前の事をこの街を歩くと気付かされる。「ホームレス」や貧乏人が特視化され追いやられるような都市ではまったく駄目なのである。東京は自ら捨て去つたこの普通な精神に見習うべきである。

高尾在住の写真家の家に上がり込み、もてなしを受ける頃には雨が強く降つて來た。冷たい雨から優しい雨に変わつていた。森の暗闇に降り続く雨の音は心地好い。

「東京へ」戻つた。



## 露宿の本棚

### 「魂のいちばんおいしいところ」

谷川俊太郎 著

なおさらである。谷川俊太郎と言えば、いまや小学校の国語の教科書にも登場する「国民的詩人」である。「かつぱかつぱらつた」で有名な彼の「ことばあそびうた」が国語の教科書に出てることで、小学生の国語嫌いの数%かは解消されているのではないか。「ことばあそびうた」をまねて詩らしきものを書いたこともある私としては、そんな大詩人を今さら紹介するというのは、照れることなのである。

前書きが長くなつた。勇気をふりしぶつて本題に入ると、この詩集、「教科書」やら「国民的」なんかどうでもいい、という方にもオススメである。中でも私は、「あわてなさんな」という詩が好きだ。

「露宿の本棚」というこのコーナー、「紹介される本がどれも暗くて、重い」という感想をある人から聞いた。人間の心の奥底に迫る真の文学とはソウイウモノなのだ!と開き直つても良いのだが、本棚なのだから一冊くらい心が軽くなるような本があつてもいいだろう。そう思い直して、あれこれ物色してみた。

ところがどうもコレダ!という本に出会わない。そこで小説に限定せずに考えてみると、自分がこれまで読んできた中で「心を軽くしてくれた本」がいくつかあつたことを思い出した。その一冊がこの本だ。しかし、この本を思い出してからこの文章を書き始めるまでには、私の心の中で長い葛藤があつたことを告白せねばならない。

正直言つて、こういうところで詩集を紹介するということはチト勇気が要ることなのだ。しかも谷川俊太郎の詩集だから

こういう表現に出会うと、「そうそう、そうだよな」と私はうなつてしまふ。この詩の後半がどうなつて、この親子のやりとりがどうなつていくのかは、読んでみてのお楽しみだ

翼をあげるわと母親は云う  
空が要るんだと息子は目を伏せる  
道を覚えろと父親が云う  
地図は要らないと息子がいなす

が、タイトルの「あわてなさんな」につながっていく流れは、上手い！の一言である。そしてこの詩の行間には、こうしたすれ違いは親子に限つた話じやないよな、ということを読みとる余地がある。本人たちは真剣なのだが、どこかこつけいで愛らしい人間同士の摩擦や葛藤。その渦中で愚痴つたり、うめいたりしている一人ひとりに詩人は「あわてなさんな」と声をかけているかのようだ。

ころころと  
心はころがる

あつちへ  
こつちへ

ころがつてぶつかる

あつちの心と

こつちの心

だが時に

一瞬に溶け合う

朝の光に艶めく  
みどりの葉の上で

ふたしづくの  
露のよう

(「ころころ」)



ぶつかりながらもころがつて、いがみあつたり、傷つけあつたり。それでも溶け合う「一瞬」をもとめて、心と心はころがりつづける。溶け合つたと思つた「一瞬」ですら、「ふたしづく」であり、決して「ひとしづく」になることはない。そんな現実の冷たさにどこかで気づきながらも、私たちの心はころがりつづけることを止めようとしない。

本書は、そんなさびしい心たちへのプレゼントしたい一冊である。(この本は、角筈・戸山・大久保などの各図書館で閲覧、貸し出しができます。)

(稻葉 剛)



ジェフ・リード

# おくりもの

みやざき ひろかず

だいすきなあのひとへの おくりものをさがして ぼくはたびにでた

ぼくがおくりたいのは たとえば あけたとたんにてんしがとびだす びっくりばこ

たとえば みずをやるとすぐにめがでて それがポンとふたつにわかれ そこからおつきさまがのぼる つきのたね

たとえば おとがはな になつてとんでいくオカリナ

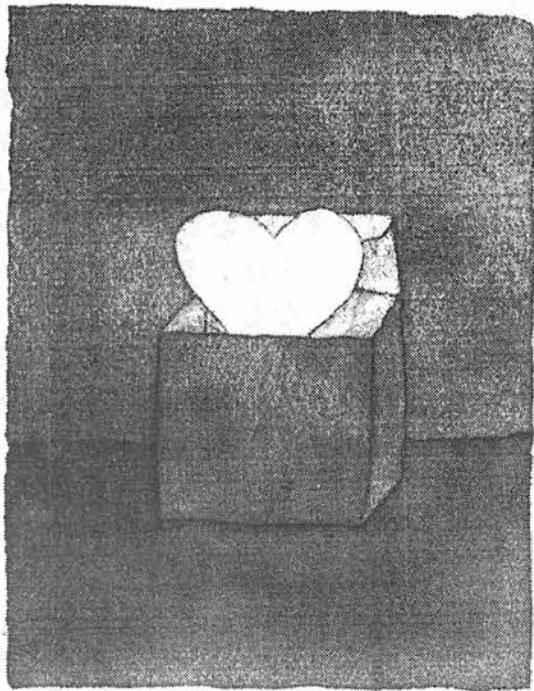
たとえば…もうぼくがおもいつかないくらいステキなもの

なにしろ おもいつかないものだから えにも ことばにもできないよ

ぼくのおくりもの  
どこかにきっとあるよ

さてさて、人に贈り物をする時、相手への想いが強ければ強い程何を贈るのか悩んでしまう。自分の気持ちを物に託すのは難しい。捜して結局妥協した物を渡し、言葉もうまく添えられず空しさはつのる。どなたか、いい案があれば教えて下され！

恩田美代子



文、絵 みやざきひろかず  
発行 クレヨンハウス

# はり師いが丸の

## 肝心かなめ —

はり師 いが丸

中国古代の養生書「黃帝内經（こうていだいけい）」によると、冬は「閉藏（へいぞう）」の季節。万物の生機が閉じこもり、天の陽気は万物から遠ざかる。早寝早起きをし、欲望を潜めながら体内の陽気を洩らさないように寒さを避け体を暖かく包めよ。とある。

簡単に言えば、冬は自然界のものも全て活動的ではなくなるから、人間もおとなしくしてなさい、というところか。自然の撰理に逆らわないのが東洋医学の特長である。

一方、春は「発生」の季節。養生法としては夜更かしをしてもよいが、朝は早く起きるようにし、春に芽生えた万物と同じように心身共に生き生きと陽気を発生させ、天地間の陽気を胸一杯にとりこみ、体内の陽気を大事に育てると、次の夏を迎える備えができるとのこと。

花の蕾（つぼみ）がふくらみ、つつましげな春の花がひとつひとつ咲いていく様を見ていると、静かに心が少しずつ躍動していくのは今も昔も同じこと。春の陽の光を指の先まで吸収して縮こまってしまった体を伸ばしてみませんか。

「閉藏の季節」などといかめしいことを言わなくとも、こんな容赦ない冬の冷たい風と闘っていたら、誰だって表情さえもかたくなってしまう。毎冬、体もかたくなり、血のめぐりも悪くなり、腰や膝が痛い人、風邪をこじらせている人にたくさん出会う。そしてどの季節よりも多く、仲間の訃報を耳にする。路上は、風邪をひいた人に「あったかくして栄養とってゆっくり休んでくださいね」という当たり前のセリフさえ言える環境にななく、何処にいる時より春を切望してしまうのだ。

「露宿」第7号（1周年記念号）は6月25日発行予定です。

原稿、広告の〆切りは5月28日（日）必着でお願いします。原稿の様式、形式は一切なし。ペンネームおおいに可。広告の裏でもピラの切れ端にでも思った事をドンドン投稿して下さい。投稿は郵送、FAX、手渡し、口答、Eメール何でもござれ。心あたたまる作品、批判精神たっぷりな作品などこころよりお待ちしております。

また、広告も大募集中です。露宿は、あなたを広告致します。印刷部数1000部の今話題の雑誌につき宣伝効果抜群！レイアウト代込みで半ページ5,000円（値下げ交渉可）で受け付け中！申し込みは原稿をFAXもしくは郵送でお送り下さい。

## ろじゅく編集室 独立！

今号より「露宿」の編集、発行、販売体制が変わりました。ろじゅく編集部の住所、電話、FAX番号、郵便振替口座が以下の通りになりましたので宜しくお願いします。

新住所 〒170-0014 東京都豊島区池袋1-14-5-13 ろじゅく編集室  
TEL/FAX 03-3981-6746もしくは090-3818-3450（笠井）  
Eメール rojuku@d9.dion.ne.jp

郵便振替口座 00160-6-190947 加入者名「ろじゅく編集室」

尚、新宿連絡会の連絡先については従前の通りですので、炊き出しなどの支援活動へのカンパなどは新宿連絡会の方にてお願いします。

### [露宿定期購読の御案内]

路上文芸総合雑誌「露宿」はもちろん全国の本屋では売っていません。毎号確実に読者のお手元に届けるために当方では定期購読を承っております。

定期購読8回分 5000円（郵送費込み）

定期購読4回分 2500円（郵送費込み）

もちろん、一回ごとの購入でも大歓迎。一冊送料込みで660円となります。その場合は御面倒でも継続購読を連絡して下さい。

### 申し込み方法

郵便振替用紙（00160-6-190947ろじゅく編集室）に定期購読もしくは継続購読とお書きになり、住所、氏名を明記の上送金して下さい（発行ごとに郵送します）。尚、郵便振替の他、切手での受け付けもしております。FAX、メールにても注文承り中。

まとめ買いはお安くなります。

2冊以上は送料無料、5冊2000円、10冊3500円、50冊15000円（いずれも送料込み）となります。

### 編集後記

「散る桜を手につかむ事ができると幸せになれる」と友達がのたまうので、桜の樹の下でしばし格闘。

『桜舞う 空を見上げて まぶしさに これも幸せ？ なんちゃってね』

新潟のお花見は4月23日だそうです。桜つかみにいざ旅へ、湊町にでもいってみるかな。（お）

### ろじゅくスポンサー募集中！

ろじゅく編集室では路上生活者の皆さんのが応援を雑誌「露宿」を通じ強めていきたいと考えています。今後「露宿」を販売し新宿連絡会に炊き出し費用を供出するのみならず、露宿ペン俱楽部や新宿連絡会と一緒にアップして映画会や演奏会、演劇会などを路上で催す企画、他方で社会に理解を求める作業としてホームページ開設や「ろじゅく展」などを計画しております。「露宿」は前号から（株）ラジオグラフィー様の御好意により印刷していただいておりますが、今後新規事業を展開するに当たり、若干ながら資金が必要となります。「露宿」を応援して下さる方々、また今後の事業展開の主旨を御理解頂ける方々の御支援を賜りたいと存じます。

ろじゅくスポンサー  
(一口100円以上。何口でも)

スポンサーになられた方々には不定期刊の「露宿ペン俱楽部便り」（露宿番外編）を無料発送致します。

郵便振替用紙（00160-6-190947ろじゅく編集室）に、「ろじゅくスポンサーになりたい」とお書きになり、住所、氏名を明記の上、送金してください。

# Rojuku

定期購読大募集

♪露宿を置いて下さるお店・スペースを探しています。お気持ちのある方はぜひご連絡下さい。まとめ買いの場合は、とてもお安くなります。

♪露宿では広告を募集しています。又、投稿お便り、大歓迎です。下記住所のほか、「露宿ベン俱乐部専用ファックス」03-3981-6746（番号が変わりました）がございます。「露宿」の注文・原稿送付・広告申込・お便り等、何にでもお気軽にご利用下さい。

「ろじゅく」

この雑誌は、路上生活者の方達が読み、書き、表現をする場を提供する為、つくれました。一冊でも多くの雑誌を印刷し、路上生活者の方に手渡したい思いと、利益が出れば炊き出しのお代にしたい為、心苦しい限りですが、多くの方のご理解とご支援をお願い致します。皆さんのお気持ちに届く、熱く丁寧な雑誌づくりを目指します。

購読費・スポンサー費送り先

郵便振替口座

00160-6-10947

「ろじゅく編集室」

露宿 ROJUKUはココで買えます。

◆模索舎 東京都新宿区2-4-9 TEL/FAX 03-3352-3557 ◆TACO ché 東京都中野区中野5-5-2-15 中野ブロードウェイ3階 TEL 03-5343-3010 FAX 03-5343-4010 ◆野宿者・人権資料センター 東京都新宿区大京町3新大京マンション304号TEL/FAX 03-3226-6845 ◆山谷労働者福祉会館 東京都台東区日本堤1-25-11 TEL 03-3876-7073 ◆新宿中央公園ポケットパーク（毎日曜午後6時から8時まで）TEL090-3818-3450 ◆石手寺 愛媛県松山市石手2-9-21 TEL089-977-0870

路上文芸総合雑誌「露宿 (ROJUKU)」第6号 2000年4月25日発行（隔月刊）

主宰・笠井和明 編集/発行・ろじゅく編集室〒170-0014 東京都豊島区池袋1-14-5-13  
TEL/FAX 03-3981-6746/090-3818-3450（笠井）Eメールrojuku@d9.dion.ne.jp

郵便振替口座 00160-6-190947 加入者名「ろじゅく編集室」

販売協力・新宿連絡会、露宿ベン俱乐部 印刷・株式会社ラジオグラフィー